

AGU 環境人文学フォーラムの構築 ——環境をめぐる人文学諸分野の対話に向けて

Building the AGU Environmental Humanities Forum: Towards Dialogue on the Environment in the Humanities

研究代表者 結城正美

Masami YUKI

環境問題は物理的環境に現出するが、そもそもの原因は人間にあり、人間のものの考え方や価値観が問題の根底にある。文化、歴史、言語、ジェンダー、人種をはじめとする多様な問題域において、人文学は意味や価値の問題に取り組んできた。そうした人文学の知を結集して環境の問題に取り組む動きが環境人文学（Environmental Humanities）である。事実上の開拓者であるオーストラリアの研究者たちはこう述べている。「環境人文学は、批評と行動が同時的である難しい空間に身をおく努力にほかならない。したがって、人文学諸分野にふさわしい問いやアプローチを再想像することが求められる。何世紀にもわたって築かれてきた知や実践の蓄積をどのようにつくり直せば、新たな課題に向き合い、^{モア・ザン・ヒューマン}「人間以上」と関わるかたちで「人間」について生産的に再考することができるのか」¹。環境人文学は、危機的な地球システムに人文学を再登録する動きなのである。

本研究では、サウンドスケープ研究（鳥越けい子）、日本文学（佐藤泉）、米文学（西本あづさ）、英文学（松井優子）、言語哲学（エリン・マクレディ）、環境文学（清水美貴、結城）をそれぞれ専門とするメンバーが個別に進めてきた研究を環境という視座からとらえ直し、相互の研究の接点を可視化することにより、環境をめぐる問題を多角的に考察する学術的コミュニティ——AGU 環境人文学フォーラム（以下、AGU EH Forum と略）——の構築を目指した。その具体的な手立てとしてオンライン研究会（オンライントーク 8 回、オンライン読書会 1 回、ゲスト講師によるトークを含む）を実施した。いずれも AGU EH Forum メンバーだけでなく学内外に開いたオープンな研究会とした。その概要を以下に示し、2021 年度の活動について考察する。

¹ Rose, Deborah Bird, Thom van Dooren, Matthew Chrulew, Stuart Cooke, Matthew Kearnes, and Emily O’Gorman. “Thinking Through the Environment, Unsettling the Humanities.” *Environmental Humanities*, vol.1, 2012, p 3.

1 AGU EH Forum オンライン研究会概要

オンライントークの概要は各報告者による概要をそのまま再掲する。英語概要を含む詳細はAGU EH Forum ウェブサイト <https://www.agu-environmental-humanities.com/news> に掲載している。

Online Talk #1 (17 April 2021)

結城正美 (英米文学科・教授)「廃棄と祈り」

「廃棄は存在には欠かせない要素である」というケヴィン・リンチの言葉を水先案内として、本報告では、廃棄物のなかでも最も危険とされる放射性廃棄物をめぐる言説を考察する。実際には廃棄は存在に不可欠だと認識されるどころか蔑視ないし忌避されているが、リンチによれば、こうした廃棄に対するネガティブな見方の根底には清浄／不浄の二元論的思考がある。清浄と不浄の入り混じった両義的な意味空間は人を解放し、それによって新たな態度、思考、価値観を創出しうる。しかし、二元論的思考のもとで理性が情動を抑圧している限り、そうした新たな価値創出は見込めない。そのようなリンチの議論を踏まえると、放射性廃棄物やその主な出所である原発に関する問題は理性だけで片付くものではなく、情動を考慮してはじめて適切に対応することが可能になると考えられる。本報告では、スベトラナ・アレクシエービッチ『チェルノブイリの祈り』(ロシア語原文 1997 年)、建築家・宮本佳明の作品「福島第一原発神社」(2012 年)を主な分析対象とし、〈祈り〉に関わる情動ならびにその文学的・芸術的表現が放射性廃棄物の処分という喫緊の問題に与える示唆について検討する。

Online Talk #2 (15 May 2021)

鳥越けい子 (総合文化政策学部・教授)「境界と被膜」

地球に棲息するあらゆる生物は、自然に生かされ、自然と共に生きている。生物のなかでも特殊な能力をもっているヒトにとっても、この基本は変わらないが、ヒトの場合の「自然との関係の結びつき」は、他の生物に比べて実に多様かつ複雑なものになっている。

「音楽」を手掛かりに、環境と私たちとの関係を確認・考察する際に役立つのが、R. マリー・シェーファーが 1960 年代末に提唱した「サウンドスケープ」というコンセプトである。彼は「今日すべての音は音楽の包括的な領域内にあって、とぎれない可能性の場を提供している。新しいオーケストラ、鳴り響く森羅万象に耳を開け!」と述べ、現代人の美的な耳を、宇宙も含めた環境全体へと解放しようとした。その背景には、当時の北アメリカにおけるエコロジー運動があった。同時にまた、音楽の意味をその本質から問うシェーファーの哲学的な思考があった。

本報告では、シェーファーの著作や活動を紹介しながら、彼が提唱したサウンドスケープという考え方、それに基づく新たな研究やデザイン論を解説する。あわせて、私たちの文化活動に内在する「境界」と、日々の暮らしに潜む「皮膜」について考察したい。

Online Talk #3 (17 July 2021)

奥野克巳 (立教大学異文化コミュニケーション学部・教授) 「森の動物と人類学マンガ」

2006年東南アジアのボルネオ島の熱帯雨林に住む狩猟採集民プナンと暮らし始めた私は、しだいに動物が人々の暮らしに深く広く溶け込んでいることに魅了されていった。日々食べるために狩る野生動物たちに対して強いタブーが行われているだけでなく、動物たちとの関係をめぐって複雑な習慣があり、たくさんの動物譚が語られ、私は彼らが人間のことを話しているのか動物のことを話しているのか聞き分けることができなかった。私が日常的に目の当たりにする狩られた野生動物たちを遥かに凌駕する動物たちの豊かな動きは、「唯物論的に」もしくは「象徴論的に」動物を捉えているだけでは達しえないし、文字や言語だけに囚われた民族誌的な伝統を重視する人類学では扱いえないのではないかと思うようになった。マンガ家とともにフィールドに赴いたことをきっかけに、マリノフスキが約百年前に唱えたフィールドの「実生活の不可量部分」に光をあてたいと思い、近頃「人類学マンガ」を共同制作した。その制作過程で気づいた幾つかの点を共有しながら、人文学の対象をマンガで表現することの意義や課題について考えてみたい。

Online Talk #4 (27 July 2021)

Elin McCready (Professor, AGU) and Elis Ottosson (U. Gothenburg / HDK Steneby), “Patterns as Narrative: The Structure of Botanical Stories”

How can one overcome the problem of projecting human perspectives onto the nonhuman? Doing so is a key element in addressing some problems of the Anthropocene, and for an understanding of other beings capable of respecting them on their own terms. We use narrative to consider this question, and take as starting point Le Guin’s (1988) Carrier Bag theory of fiction, which rejects action and conflict as the basis of story, instead centering it around daily life and repetitive activity (cf. also Ukeles 1971). Most species in the biosphere live in ways irrelevant to conflict and resolution, particularly plants, most of which need not take life at all for survival. We conclude that, for a non-anthropomorphic understanding of the lives of plants via narrative, it is necessary to include cyclical patterned structures.

Understanding the world through patterns consisting of lines and blobs (Ingold 2015) allows us to read a story of constant entanglement and transformation. A line is a point/blob that has started to move. The circle as an image is commonly used to depict a cycle of events (such as the blooming and

decay of a flower), but is dissatisfying in that it suggests that after a full cycle we start over at the same point. Adding a spatiotemporal dimension yields a spiral (or a knot, cf. Cromwell 2004). The spiral constantly responds and refers to itself, as well as steadily moving forward. This image of dynamic dialogue (or monologue) serves as a base for a storyline of continuous entanglement and transformation which can serve as basis for a model of plant-based narrative.

Online Book Discussion (19 August 2021)

Klara and The Sun by Kazuo Ishiguro

中川僚子教授（聖心女子大学英文学科）と麻生えりか教授（本学英米文学科）をコメンテーターに迎え、カズオ・イシグロ著 *Klara and the Sun* の読書会を行った。中川教授には、廃棄、祈り、牡牛の描写の分析から、今日的な問題を提示する作品として論じていただいた。麻生教授には、ほかのイシグロ作品との比較を通して、風景描写について考察していただいた。全体のディスカッションでは、自然／人工物といった二項対立を包み込むような作品の特徴が文学やサウンドスケープの観点から指摘されたり、AI であるクララの一生を通して描かれる人間社会や内面性について議論が及ぶなど、活発な意見交換がなされた。

Online Talk #5 (27 November 2021)

山里勝己（名桜大学教授）「この危機を生きる—ゲーリー・スナイダーの再定住を再考する」

1969 年、ほぼ 12 年にわたる京都滞在を終えたゲーリー・スナイダーは、家族とともにアメリカに帰国し、1970 年秋にはカリフォルニア州ネヴァダ・シティーの森の中に建てた家で生活を始めた。キットキットディジー (Kitkidizzie) という名称を有するその家は、自らを場所 (place) を生きる「再定住者」(reinhabitory) と呼んだ詩人にとって、1960 年代あたりから顕著になった環境危機や「アメリカ」を題材とする詩や思想を創造する拠点となった。あれから 50 年、スナイダーは詩集 *Turtle Island* (『亀の島』、1974) でピューリッザー賞を受賞、アメリカ現代詩を代表する詩人の一人として知られるようになった。1996 年には 40 年かけて書かれたライフワーク『終わりなき山河』(*Mountains and Rivers without End*) が出版された。まずは、このような詩人の (再) 評価を試みてみたい。後半は、スナイダーと同世代のウェンデル・ベリーなども紹介しながら、この世代が共有していることについて言及したい。また、スナイダーとの関連で、宮沢賢治の先駆性についても考えていることを話してみたい。このような流れで話すと、昨今の研究で取り上げられるようになった “planetarity”、“place”、“planet” 等についても言及することになるだろう。

Online Talk #6 (27 November 2021)

清水美貴（英米文学専攻博士後期課程 1 年）「惑星思考の理論的展開と文学的想像力」

自然環境や社会環境を惑星の視座から捉え直すことを試みる惑星思考は、人間が地質学的脅威とされる人新世において重要性が高まっている。惑星思考は比較文学者であるガヤトリ・スピヴァクの『ある学問の死』（2003 年）においてはじめて提唱され、その後、文学研究のみならず歴史学や哲学などの人文学諸分野において理論的議論が重ねられている。それらの理論は、互いを参照しつつ、独自の理論的展開を遂げており、用語的統一もされていない。本発表では、それぞれの惑星思考の背景にある問題意識を明らかにし、それらが人間中心主義的あるいは西洋中心主義的な地球像への多様な応答であることを確認しながら、スピヴァク、デモック、ハイザ、チャクラバルティ、ラトゥールによって提唱されている惑星思考の位相を整理する。そして、「環境危機は想像力の危機である」というゴーシュの言葉を手掛かりに惑星思考の文学研究の事例を考察する。

Online Talk #7 (11 December 2021)

Sara Newsome (Fulbright scholar at AGU / PhD student, UC Irvine), “The Body in Ishimure Michiko’s Modern Nō Plays”

Analyzing the role of bodily autonomy in Ishimure’s *shinsaku nō* plays suggests a collectivist view of sacrificing one’s individual autonomy for the greater good of the environment. Though very different in genre, plot and performance, both *Shiranui* (2002) and *Okino-miya* (2014) involve religious sacrifices meant to change the environment in some way. In *Shiranui*, kami have been sacrificing themselves in the face of man made pollution, and they perform a religious rite to bring the earth into a new age, one free from human pollution. In *Okino-miya*, the religious sacrifice is to summon rain following a drought. In both cases, the body does not belong to the individual, but rather is seen as a tool within the greater collective cosmos. A close ecocritical reading of the two *shinsaku nō* plays suggests that we reject any government control over our bodily autonomy and instead surrender it to our environment.

Online Talk #8 (29 January 2022)

松井優子（英米文学科・教授）「地球の時間—歴史小説家スコットを生誕 250 年後に〈環境〉の視点から考える」

2021 年に生誕 250 周年を迎えたロマン派詩人にして歴史小説家 Walter Scott (1771-1832) の活動は、進展する産業化や都市化との交渉のなかで展開された。彼はスコットランドのボーダーズ地方の口承の伝統を記録するバラッド編纂者としてメジャー・デビューする。その後、小説第一作 *Waverley* (1814) では、小説というジャンルと社会変容との関係

について問題提起し、晩年の *Count Robert of Paris* (1831) では、機械仕掛けのライオンやオランウータンを登場させ、プレヒューマンやポストヒューマンの問題を予感させる、実験的な作家でもあった。一方では、スコットランド、エディンバラ市民として鉄道敷設委員会や石油ガス会社の運営に関わるほか、スコットランド王立協会総裁も務めている。その彼の詩や歴史小説は今度は、あらゆる媒体を通じて19世紀の英語圏やヨーロッパに遍在し、読み手や聴衆の空間・時間意識の一部を形成することになった。

本発表では、1831年の火山島訪問をめぐるエピソードを紹介しつつ、19世紀英語圏におけるScott作品受容の実態を概観し、近代における歴史意識の共有について考える。そのうえで、Scottによる火山島訪問記の歴史的・文化的背景について検討し、250年後の現代における「環境」の視点からScottの歴史小説を再考する土台としたい。

2 学際的な対話に向けて

以上のオンライン研究会に加え、本学がノルウェー研究評議会とノルウェー国際協力・高等教育推進庁の助成事業「優れた教育・研究・イノベーションのための国際パートナーシップ」(INTPART)に採択された研究課題The Asia-Norway Environmental Storytelling Network (ANEST、拠点大学・スタヴァンゲル大学)のパートナー大学であり、海外8大学(ノルウェー、中国、台湾、香港)との研究・教育交流が進められていることから、本研究プロジェクトを通してANESTへの貢献を目指した。具体的には、ANESTオンラインミーティングへの参加(結城、清水)、ANEST International Workshop(オンライン開催)での研究発表(マクレディ、結城)を行った。

研究課題名が示すとおり、本研究では「環境をめぐる人文学諸分野の対話」を目指した。研究会を通して、専門分野の異なるメンバーが環境をめぐる意味や価値観について話し合う土台はある程度整備できたのではないかと思う。ここでいう対話は、言うまでもなく学際的対話を指すが、日本語では「学際的」と一括りにされがちな状況が、英語では“multidisciplinary”、“interdisciplinary”、“transdisciplinary”という語で次のように差異化されている。

多分野的 (multidisciplinary) 同一ないし相似した問題についていくつかの専門分野が取り組むあり方。

分野融合的 (interdisciplinary) 複数の専門分野からとられたツールや概念を統合ないし融合させるあり方。

分野包括的 (transdisciplinary) 専門分野の壁や規範を破り分野を「超越」して、より大きな枠組みを追求するあり方。このタイプの研究は、市民や非学術的参

加者が関与するものを含まない。²

2021 年度の本研究の活動は、上記の分類で言えば「多分野的」なステージにあった。それを「分野融合的」な段階に発展させ、地球システムの危機に対応しうる人文学諸分野の問いやアプローチを協働的に検討するプラットフォームを形成することが今後の課題である。

² Klein 1993; qtd. in Jesse D. Peterson, “Doing environmental humanities: inter/transdisciplinary research through an underwater 360° video poem,” *Green Letters*, vol. 23, no. 1-2, 2019, p. 69.